広島における地下壕と朝鮮人労働者(1)

―ドキュメンタリービデオ『土の記憶』フィールドノート―

伊藤　園実

1　はじめに：軍都廣島との出会い

広島に移り住んだばかりの頃、まず街の風景に驚いた。市内を流れる幾つもの川や瀬戸内などの水辺が美しい街に、被爆のモニュメントがいくつも溶け込むようにあった。原爆ドーム以外にも被爆建物があり、その中に大きな軍事施設があることに衝撃を受けた。日清戦争当時、軍の最高司令部であった大本営、軍港として日本各地から集まった兵隊や物資を戦地へ送り出していた宇品港、陸軍糧秣支廠、陸軍被服支廠などなど、加害の顔が平和都市をうたう広島に傷跡のように残っていた。欧米列強に追いつき追い越せと、帝国主義に走った日本の近代の歴史が、近代広島の発展の歴史と重なっていたことを全く知らなかった私は、ここに来るまで朝鮮半島にいる被爆者のことさえ知らなかった。大変に恥ずかしいことなのであるが、戦争の実情や今に続く被害の実態を正面から考えてこなかったのである。

広島平和記念公園で韓国人原爆犠牲者慰霊碑を初めて見た時、正直なところ、軍都廣島と韓国人被爆者がつながらなかった。しかし平和関係の集会やフィールドワーク、戦後補償裁判の傍聴などに参加していくうちに軍都であるがゆえに大勢の朝鮮人が広島に来ていたことを知るようになった。

集会やフィールドワークなどに参加して、当事者の証言を何度も聞いた。その悲惨な経験を語る作業がどれだけ辛く大変なことか。次代への継承のために語る高齢者に対して、聞いた自分にも継承の責任が生じると次第に感じ、私もその一端を担いたいと思うようになった。軍都廣島と朝鮮人の関係を知ることは、戦争の実相の一面にせまることになるのではないか、そう考えビデオ制作を企画した。映像を表現手段に選んだのは、広島の軍都時代を扱った映像作品が極端に少なかったからである。

題材を戦争遺跡（近代日本の戦争で国内外に作られた構造物や遺構などのこと）の一つである地下壕にしたのは、1992年に広島の強制連行を調査する会（以下「調査する会」）がまとめた『地下壕に埋もれた朝鮮人強制労働』という本がきっかけだった。「地下壕」「埋もれる」「朝鮮人労働」全ての言葉に避けては通れない力があった。

戦時中、軍関係の施設が設置され、小高い山などがある地域は、その下に地下

壕がはりめぐらされている可能性がある。知らず知らずのうちに戦争遺跡の上に住んでいるかもしれないのだ。事実、地下壕は私たち夫婦の散歩道にもあった。広島に来て以来、すっかりお気に入りになった宇品海岸。山の崖にあるコンクリートの壁は地下壕入口のひとつだった。また家の目の前にある公園にも地下壕があったと近所の人に聞いたが、今はその存在を示すものは何も見つけられない。こうした場所には「ここは昔軍事施設でした」という案内板ひとつない。ましてや地下壕はコンクリートの壁などで覆われ目隠しされているから、目の前を通ったとしても分かる人にしか分からないのである。

また地下壕の映像をまとめた作品は、全国的に見ても私が知る限りほんの僅かであり、長野県の松代大本営予定地や大阪府の陸軍高槻地下工場（高槻地下倉庫、通称・タチソ）の地下壕が映像で残されている程度であると思われる。少なくともビデオやDVDなどで地下壕の映像を手軽に見ることはできない(2)。

2005年、私は軍都廣島と朝鮮半島のつながりについて地下壕をテーマに約58分のドキュメンタリービデオ「土の記憶」を自主制作した。地下壕を掘った当事者を探し当て、その方の故郷を訪ねるロードムービーであり、探す過程で知り合った在日コリアンや在韓被爆者の方々との出会いの物語でもある。2002年９月から2005年５月までの期間をかけて制作した。その間、私は戦争を乗り越えて力強く生きてきた人々の話を聞き、韓国と広島それぞれの故郷に対する思いを知った。そして、敗戦後60年以上経った今も抱え続ける課題が見えてきたのである。以下は、映像だけでは伝えきれなかった「土の記憶」のフィールドノートである。

2　秘密裏に建設された地下壕

2－1　地下壕に関する研究と保存の現状

「地下壕」とは、本土決戦での空襲や地上戦に備え、軍事施設を移すために掘られた防空壕の通称だ。最も広く知られた地下壕は長野県の松代大本営予定地ではないか。国土交通省などでは、民間や個人が自衛のために掘った防空壕を加えたものを「特殊地下壕」と呼んでいる。本論では軍事施設に関するものを地下壕と表記する。

地下壕は第二次世界大戦時に日本各地に作られ、韓国や中国、インドネシア、パプアニューギニアなど海外にも作られていた。海外では、日本軍の陣地などに現地の住民を動員して作られたものもある。軍需工場や弾火薬庫、格納庫、変電所、戦闘指揮所など、利用目的は多岐に及んでいた。以下では、地下壕について現在明らかになっていることを管見ではあるがまとめてみたい。

国土交通省、農林水産省、林野庁では、所在地や入口の数、大きさなど地下壕の状態を調査した報告書を作成している。「防災上の見地から地下壕の危険解消を計画的に推進する」のが目的であるため、個人や民間が作った防空壕も含まれているのが特徴であり、埋め戻したものなどは含まれていない。最も新しい調査としては平成17年度の実態調査中間報告が国土交通省のＨＰ(3)で公開されている。これによれば、「特殊地下壕」の数は、2005年度の時点で10,280ヶ所にのぼる。

埋め戻しの数を合わせると、戦争時に建設された「特殊地下壕」はかなりの数に上ると思われる。1位は鹿児島県の3,149ヶ所で、5位の広島県は614ヶ所。これらのうち軍事施設だと予想されるものは相当数あるが、場所や規模などは公表されていない。

旧日本軍の地下壕について、全国各地にある保存会や研究会などが個別に調査した資料が数多く出版・発行されているが、全国規模でまとまったものは現在までそう多くは出ていないようだ。

浄法寺（1981）は防空という軍事的観点から詳細に地下壕を取り上げているが、日本全国の地下壕を網羅的には記述してはいない。また米国戦略爆撃調査団（1946〜）には、戦後まもなく米軍が全国の地下壕を調査・検証した記録が記載されている。しかし原文は英文資料（一部日本語訳は刊行されている）であり、筆者は未見である。こちらも軍事的関心が強い内容のようである。

各地の保存会、研究会、研究者などによるものとしては、朴（1965）があり、朝鮮人と地下壕について記述されている中では先駆的なものであろうと思われる。兵庫朝鮮関係研究会編（1990）は地下壕と建設にあたった朝鮮人との関係を本格的に取り上げたものであり、文献研究を中心に、全国の概要がまとめられている。関西方面での現地調査や聞き取りも実施されている。また久保井（1995）もあり、地下壕と朝鮮人や中国人による労働について書かれている。

広島県内については調査する会編（1992）がある。中国新聞、大阪朝日新聞、企業の社史、町史、各種文献などの資料を丹念に読み込み、現地調査、聞き取り調査なども行い、県内の地下壕について詳細に記述している。

戦争遺跡全般を扱ったものとしては、十菱・菊池編（2002、2003）、戦争遺跡保存全国ネットワーク編（1999、2003、2004）、朝鮮人強制連行真相調査団編（1992、1993a、1993b、1997、2001、2002）がある。地下壕についての記述があるが網羅性は必ずしも高くない。

そもそも戦争遺跡の調査研究は困難な作業である。戦争遺跡保存全国ネットワーク編（1999：17）ではその理由が次のようにまとめられている。「1・戦争遺跡は本来秘密のうちに作られて使用され、それに関する記録は未公表のまま今日に至っている。2・この種の記録は敗戦時に秘密保持のため廃棄・焼却され、建造物も少なからず故意に破壊されたりして、その程度が軽かったものや放置されたものが、かろうじて残骸を留めているというのが実情である。3・戦争遺跡や戦争遺物を設計し、建設・製作し、使用した、いわば体験者がすでに世を去り、あるいは高齢に達し、著しく減少しているので、そのことを聞き取ることが困難である。」

旧日本軍の資料は、防衛研究所の図書館や国会図書館にある資料から捜すことは可能である。しかし「地下壕」という名称で探すことはできず、「隧道」「地下施設」「地下工場」など様々な用語からのアプローチが必要で、気の遠くなる作業をしなければいけない。また仮に地下壕が特定されても、私有地であるため、簡単には現地調査できないのである。

文化庁は2002年、戦争遺跡を将来の史跡指定に向けて調査を行い、地下壕も長野県の松代大本営予定地などいくつかを選定したが、文化財としての本格的な指定までは遠い道のりのようだ。一方で、市民による保存運動もあり、保存団体の案内で中に入ることができる地下壕もある。また国内では沖縄県や長野県、千葉県など一般公開されている地下壕が８ヶ所程度あるが、広島県内を含めた中国地方では、一般公開している地下壕は一ヶ所もないようだ。

筆者がこれまで取材した広島の地下壕は保存に向けた活動がまだ行われていない。ビデオで取り上げた海田町の地下壕は撮影中に埋め戻され、宮島などにある地下壕も次々と埋め戻されている。保存運動の一方、各地で埋め戻し事業も行われているのだ。

建設省（現・国土交通省）は1974年度から「特殊地下壕対策事業」(4)を実施。地下壕の調査を行い、自治体に埋め戻しの補助などを行っている。広島で聞いた証言では、地下壕は子どもたちの格好の遊び場になっていたようである。恐らく他の地域の地下壕も同じような状況であると考えられる。地下壕内での死亡事故の発生や陥没、崩落などの災害が発生するとして、国土交通省や農林水産省、林野庁といったいくつかの省庁が関わり、埋め戻しを推進しようとしている。

２－２　地下壕についての証言

地下壕を掘った人々を探し出すことはさらに困難である。前出の兵庫朝鮮関係研究会編（1990）と、朝鮮人強制連行真相調査団編（1992、1993a、1993b、1997、2001、2002）では地域ごとに地下壕の建設に関わった証言が随所に出ているが、その他の地下壕を取り上げた書籍には当事者の証言はほとんど見あたらない。強制連行に関する書籍や資料の中に出てくる個別の証言をみていくと、地下壕を掘っていたという言葉に出会うこともある。膨大な文献の中の限られたものしか見ていないが、筆者が見た限りでは地下壕を掘った事実に重きがおかれ、場所の特定や労働実態など表現されていないものが多かった。

広島県内の地下壕については、調査する会編（1992）に証言が出てくる。取り上げられた10地域中、実際に建設に携わった人自身の証言は地御前地域（韓国人）と祇園地域（在日コリアン）、秋月地域（日本人）の３ヶ所である。ほかには朴（1983：229）、朝鮮人強制連行真相調査団編（a1993：155、156）、鎌田編（1982：134）に証言があった。

また平岡（1972：213）、広島・長崎の証言の会（1986：98）、小倉（1970：221）にも証言があるが、労働の実態は明らかになっていない(5)。

戦時中の国内の労働状況などを考えると、朝鮮人が関わっている可能性が高いと思われるが、証言は非常に乏しい。在日コリアンが大勢日本で暮らしているにもかかわらず証言が少ないのはなぜなのかと不思議に思う。強制連行で来日した人々が多かったため（強制連行で来日した人々は敗戦後ほとんど帰国したと言われている）とも考えられるが、今のところ理由はわからない。地下壕は、そのものも作業した人々もまさに隠れた存在となっているのである。

2－3　広島における朝鮮人労働

戦前、朝鮮半島から多くの人々が日本に渡っていたが、広島県も同様だった。特に軍都として発展していた広島は多くの労働力を必要としていた。朝鮮人強制連行真相調査団編（2001）、市場（2005）によると、広島市内には第二総軍司令部や広島憲兵隊など38もの軍事施設が設置されていった。加えて大規模な軍需工場の新設、道路や鉄道、ダム、発電所の建設といった施設が拡げられる中で、朝鮮人が働いていたのである。

1912年の時点で広島県における在住朝鮮人は男女合わせて57名であり、以後横這い状態であったが、1914年の第一次世界大戦勃発後の1917年に986名と急増する。1923年には3,086名となり、満州事変や日中戦争などを経て増加の一途をたどる。1944年の時点では81,863名へとふくれあがっていた（朝鮮人強制連行真相調査団編、2001：106）。

特に広島市は特定の地域からの移住者が多かった。「韓国のヒロシマ」と呼ばれる現在の韓国慶尚南道陜川郡である。この名称はこの地域に被爆者が多いことから由来しているようだ。被爆当時、広島市内には4,101名の陜川出身者がいた（市場、2005： 296）。「広島で出身を聞く必要はない。なぜなら皆、陜川出身だから」という逸話が残るほどなのである。

陜川郡は慶尚南道の西北部に位置し「韓国のチベット」ともいわれるほどの山岳地帯。郡庁所在地である陜川邑は釜山から北西に車で2時間ほどである。陜川郡は現在、1邑（日本では町に相当）と16面（日本では村に相当）から構成され、郡全体の人口は約58,000人、陜川邑で約12,700人（2004年12月現在）である。

広島になぜこんなに陜川出身者が多かったのか。真偽のほどは定かではないが、陜川出身者の一人が広島で成功し、その噂を聞いた人々が広島に集まってきたと言われている。このことはいくつかの資料（例えば市場、2005：303、304など）や、私が直接聞いた在韓被爆者や在日コリアンの証言からも推測できる。市場（2005：138）によれば、在韓被爆者の渡日理由を見ると陜川は「生活のため」が圧倒的に多いという。日本の植民地政策から生活苦となり、生きる道を広島に求めたのである。また「徴兵・徴用による強制連行」もあった。

陜川出身者は広島市内で集落を作っていた。「陜川から日本に渡り、広島で仕事を見つけて住みつくようになった人々は、立地条件が悪く、かつ工事現場や工場などでの肉体労働による働き口の多い地域に、朝鮮人集落を作って生活していた。しかも、そうした朝鮮人集落は日本人社会からは差別され、疎外された状態に置かれていた」（市場、2005： 302）とある。500人以上の集落もあった。ある人は親戚と、ある人は同郷の知り合いと近くに住み、寄り添って生きていたのである。

陜川出身者の広島での仕事は多くが前述したような肉体労働の現場だったようだが、運送業、漢方薬局など様々な職についていたようである（市場，2005）。私が出会った被爆者から以下のような証言を聞いた。

・Aさん（1939年吉島生まれ、女性）

父親は陝川出身。両親は20才前後に韓国で結婚。農家をやっていたが食べられなくなり、父親が先に広島に来た。広島では自転車で古い物を集めては、問屋に売る古物屋をやっていた。(2006年２月15日の聞き取り)

・Bさん（1929年東京生まれ）、Cさん（1932年大阪生まれ）、Dさん（1939年広島生まれ）：いずれも女性

三姉妹の両親は陝川出身、韓国で結婚。「闇の船」で来日したという。両親は最初東京に住み、次に大阪、そして広島に来た。両親は江波で三菱に務める朝鮮人（15,6人ぐらい）に食事と宿を提供する飯場を経営していた。８月６日の原爆投下時に、Bさんは舟入川口町の工場で働いていた。(2006年2月15日の聞き取り)

・Eさん（1928年京都生まれ、女性）

両親とも陝川出身で結婚後来日。韓国では農業をしていたが、広島にいつ、どういう経緯で来たのかはわからない。Eさんが気が付いた時にはすでに広島の江波に住んでいた。親は朝鮮人相手の雑貨店を江波で経営。チェサに使う小物や豆もやしなどを売っていた。遠くから買いに来る朝鮮人も大勢いた。父親を13歳の時に病気で亡くし、母親、妹２人の４人で生活。小学校卒業後、広島電鉄バスの車掌になった。３年間勤務したが足が痛くなって４月に退職。翌５月から舟入川口町の工場で火薬をつめる樽を作っていた。お金は一銭ももらえなかった。大勢働いていたが、３分の２ぐらいは朝鮮人だった。7月に挺身隊にかかり、母親に言われるまま16歳で結婚（結婚すると挺身隊に行かなくてよかったため）。夫も陝川出身者で、三菱造船所で働いていた。(2006年８月28日の聞き取り)

3　地下壕を掘った人々

3－1　地下壕の中へ、そして証言を求めて

2002年９月、調査する会の内海隆男氏に連絡を取り、同会のメンバーに協力を得て、地下壕めぐりが始まった。初めに入ったのが広島市に隣接する海田町の地下壕だった。私の地下壕の印象はそこでついたといっても過言ではない。地下壕は戦争のむなしさを実感するにあまりあった。

海田町は広島、呉という軍事拠点に囲まれていた。呉に向かう鉄道の分岐点である海田市駅は、戦争のための物資や人員輸送の拠点としての機能を果たすようになった。1935年以降は陸軍による海岸部の埋め立てなども行われ、土地が広げられていった。戦争中は鉄道の敷設や軍用地の接収が行われ、陸軍被服支廠の倉庫や海軍の第十一海軍航空廠の工場などが設置された。かつて被服支廠の倉庫は現在の陸上自衛隊の中にあり、戦前は海田市駅から倉庫まで伸びる引き込み線もあったようだ。

地下壕は第十一海軍航空廠の工場の先に掘られていた。一部は銃器製造工場として操業していたらしい。当時、第十一海軍航空廠があった辺りは畑ぐらいしかなく、家も数件といった状況だったようだ。今は海田中学校がその敷地内に建っ

ており、周辺は住宅地になっている。戦前から住む人々はほとんどいないようだ。

歴史への入口は意外な場所にあった。小高い丘の道なりに建ち並ぶアパートや民家。その一画にある民家の後ろには竹やぶが茂っている。この茂みの中にある狸か狐の住処にしか見えない大きさの穴。それが地下壕の入口だった。

身をかがめて中に入る。真っ暗で懐中電灯の明かりがあたる部分しか前は見えない。しばらくして目が慣れ、いろいろな場所に光をかざして驚いた。住宅の天井くらいまである高さと、大人2人が横に手を伸ばしたぐらいの幅があるのだ。地下壕に入った日、外はかなり暑かったが、穴の中はひんやりとしていた。「さあ、行きましょう」と内海氏は我が家のように歩き始め、あっという間に暗闇に消えていった。私は慌てて後を追いかけた。

その空間は今まで経験したことのない場所だった。懐中電灯を消すと方向感覚がなくなってしまう暗闇に包まれる。空中に浮かんでいるような感覚になるのだ。入ることのできた地下壕は2ヶ所あった。1ヶ所が総延長約394mで、もう1ヶ所は総延長約260mとかなり奥深い。いずれも蟻の巣のように網目状に入り組んでいて、上に伸びる空気穴もあるほど複雑だった。内部にはトロッコの跡やコンクリートの土台、発破やダイナマイトの跡、つるはしの跡が、当時のままの状態で残されていた。水がたまり簡単には歩けそうもない通路もあった。奥深く複雑なその形状は深淵な戦争の姿そのもののように感じた。

こうして地下壕を撮影し始めた。広島市内はもとより、山口や瀬戸内の島にも足を運んだ。6市町40ヶ所近く訪れたが、埋め戻されていたり、現在も利用されている地下壕を含めると中に入ることのできない地下壕は数多くあった。

この海田町の地下壕は、調査する会の取材で朝鮮人が掘っていたという証言を近隣住民から得られていたが、掘った人は見つかっていなかった。敗戦の日、一人の朝鮮人が「日本まけた、朝鮮かった、バンザイ」と言いながら大きな声で叫びながら飛び出して来た（調査する会　1992：134）という証言があり、調査する会にとっては思い入れの深い地下壕とのことだった。

私は地下壕の近くで、古くから住んでいそうな家や寺など一軒一軒、尋ねて回り、証人を探すことにした。取材を断られたり、不在だったりと、悪戦苦闘した。「地下壕のことなんですけど」と切り出すと、ほとんどは「知らない」という答えが返ってきた。地下壕の存在自体知らなかったとは思えないが、隠しているかのような対応ぶりには驚いた。地下壕のそばに戦時中住んでいた人がいる、その人なら何か知っているかもしれないと言われたが、すでに近畿方面に引っ越していた。

地元の役場や資料館、図書館で資料を調べ、地域の神社などにも聞いてみた。地下壕の存在までは分かっていても、掘った人がどこの誰かまで知る手がかりを見つけることはできなかった。

地下壕周辺を何回、通ったことだろう。2002年12月初旬、地下壕の近くに住む家を訪ねた。玄関のチャイムを押すと、ゆっくりと戸が開いた。80歳近い女性が

怪訝そうに顔を出した。調査する会（1992：126）にも証言者として登場した方だった（カッコ内は筆者による）。

「あのう、裏の地下壕について調べているのですが、何かご存知ではありませんか」

早速取材を申し込むとすんなり許可がでた。おずおずと質問する私に躊躇なく答えてくれた。

「朝、おきて見りゃあ前の畑に電柱がたち、小屋が建っていた。ほして防空壕掘りよる」

「何年頃ですか」

「昭和19年ごろじゃろうよ」

「軍が掘っているというのは、すぐわかりましたか。誰が掘っていたかわかりましたか」

「十一空廠がくるいうのは聞いたがね。（掘っていたのは）朝鮮人じゃいうのはわかったがの」

「どうして朝鮮人だとわかりましたか」

「朝鮮語は使わせんが、言葉でわかるよね。十人ぐらいおったかな。挺身隊もきていた」

「その朝鮮人の方なんですが、ご存知ないでしょうか」

「終戦になってからもここに住んでたよ。ええ人じゃったよ。奥さんもええ人じゃった」

証言してくれた方は掘った人と言葉を交わす程度の交流はあったようだ。敗戦後も地下壕の近くに家族で住んでいたという。しかし本人はとうの昔に亡くなり、家族も引っ越してしまったという。引っ越し先などは当然わからない。情報はその場で途切れてしまった。ここまでは調査する会が調べた内容とほぼ同じだった。掘っていた方の通称名の名字だけ聞くことができた。わずかな手がかりはａさんという名字だけだった。

海田町の古い住宅地図を見た時、小躍りした。近所の人が教えてくれた通称名が書かれていたのだ。ａさんは確かに何年か前まではこの地に住んでいた。やっぱりいたのだ。急に生身の人間として私に迫ってきた。

今度はａさんという名前を頼りに在日コリアンの方たちを尋ねた。撮影を始めた当初は在日コリアンに知り合いはいなかったから、少しでも知っていそうな人がいたらツテをたどって紹介してもらい、電話や直接会うなどして聞いて回った。しかし「地下壕を掘った人なんか、見つかるはずがない。ほとんど帰ってるよ。在日コリアンの中でもそんな話を聞いたことはない。まず無理」という返事もあった。

通称名の名字だけを手がかりに在日コリアンを訪ねたが、具体的な情報もないまま、時間が過ぎていった。ａさんの取材が行き詰まりつつあった2002年12月のある日、地下壕の入口だった場所はコンクリートの壁で覆われていた。「事故の危険性がある」「非行の温床になる」の理由で地主が埋め戻しを希望したのだ。

戦争の歴史を語る遺跡がまた一つ姿を消したのであった。

3－2　海田町の地下壕を掘ったＦ氏：生活の場を求めて来日

2003年１月のある日、ａさんのことを尋ねていた在日コリアンの方から電話があった。ａさんの子どもと連絡がとれそうだというのだ。ａさんの息子であるＦさんは広島県内に在住していた。しかもなんとＦさん自身が地下壕を掘っていたらしいという。寝耳に水だった。そのことを教えてくれた方も少し興奮気味だった。Ｆさんと連絡がとれる方を仲介しての取材であったが、一度取材した後は私が直接連絡することとなり、その後、何度も聞き取りを行った。

Ｆさんと最初に会ったのは入院先の病院だった。個室のドアを開けると、白髪の高齢の男性がベッドに横たわっていた。私たちの顔を見て、ゆっくりと体を起こす。きゃしゃで色が白かった。地下壕掘りという肉体労働をしていたイメージから、色が黒く、がっちりとしている方を想像していたので意外だった。

調査する会のメンバーと一緒に地下壕について話を聞いた。Ｆさんははっきりと、しかもまるで昨日のことのように話し始めた。具合が悪そうに見えたが、矢継ぎ早の質問にも丁々発止と答える。話し始めると顔に赤みがさし、元気になったようにさえ感じた。その記憶力のよさにはとても驚かされた。

Ｆさんが７、８歳の頃、父親のａさんは故郷の慶尚南道陜川郡で生活ができなくなり、仕事を探しに家族をおいて故郷を離れ、単身満州へ渡った。その後、５、６年間は音信不通になり、死んだのではないかと言われていた。しかしａさんは親戚を頼って広島に来ていた。働き口を得たａさんは母親と妻、子供３人の家族５人を呼び寄せた。1926年生まれのＦさんが広島に来たのは17歳の時だった。ａさんは東洋工業の下請の仕事や陸軍運輸部の下請企業、同郷の朝鮮人のもとなどで働いた。

Ｆさんが19歳になる時、ａさんが朝鮮人を集めて土木工事の組を作り、日本の企業からの下請工事を始めた。ａさんは組のまとめ役で、仕事をとってくる人夫頭だった。軍の孫請けの仕事は賃金もよく、軍からの配給などで食べ物もあったため、作業する人はすぐ集まったらしい。ａさんの組で働いていた人は30～40代の独身者で、ほとんどが同郷の陜川出身者であった。当時そうした朝鮮人の組は広島にいくつもあったという。朝鮮人は埋め立てや荷受け、住宅建設、鉄道などの仕事をしていたようだ。軍関係の仕事もしていたが、その一つが地下壕だった。Ｆさんは「地下壕は朝鮮人が掘ったと考えていい（2003年１月24日の聞き取り）」と証言している。

海田の地下壕はＦさんが現場の責任者となって同胞たちと掘っていた。日本の企業からの下請だった。１ｍ毎にいくらという契約で掘削業務を請け負っていたらしい。「毎月何日と決算する日が決められていて、掘った分だけもらえた（2003年３月12日の聞き取り）」とのことである。Ｆさんたちは測量から掘削、コンクリートでの仕上げ作業まで行っていたようだ。海田の地下壕は1944年から掘り始め、完成することなく敗戦を迎えた。

以下はＦさんの言葉である（カッコ内は筆者による）。

「最初は海軍の兵隊さんらが掘りよった。あそこはね。掘りよったけど、坑道にならんのじゃけ。飯場入れて専門的にやらんかいうことじゃったらしいんじゃが、結果、飯場がなかったわけなんよね。ほいでうちらが最初に行ってやろういうことになって、全部任してくれて海軍がやめてしもうた。当時は食べ物はあまりようなかったですけんね。戦争中は。うちら飯場をやりだした時は食べ物もよかったしね。それで人がすぐ集まってきた。だいたいいうたら（朝鮮半島から）働きに来た人多いよね。あとは徴用で来るか、挺身隊で引っ張られてくるか。発破をかけるのは見りゃあできるけんね。（仕事を教えてくれる）先生いうのはおらんよね。電気の配線などもやったが、十一空廠で働いていた朝鮮の人から教えてもろうた。仕事いうのんは僕ら見てできんもんはない。なんでもやりおった。今でもそうよ。」（2003年３月12日の聞き取り）

「堅いところは削岩機で、柔らかいところはつる（＝つるはし）よね。日本人いうたら、設計する男と日本の（下請）企業の監督。それだけ。削岩機で10～12個くらい穴を掘って、中に火薬を入れる。タバコの火をポンポンと（順番に）つけて急いで出る。終（しま）いの分はすぐよ。はよ逃げなあ。危ないよ。あん時は免許はありゃあせんよ。（仕事を引き受けるのは）危ないけん、誰でもしてくれんよ。当時は朝鮮人じゃなかったら土方するもんおらんもん。海田中学校のまん前に大きな池があって、そこまで続くトロッコで土を運んだ。挺身隊の女の子がいっぱいいっぱいきとったけど、仕事しやあせんのじゃけえ。わあわあ言っちゃあ。挺身隊の女の子は（土を運びに）行ったら帰ってきやせん。１時間でも２時間でも。えーたっとる（＝よしとして一応終わりにする）んじゃけえ。挺身隊は近くに寮があって、そこで寝泊まりしていた。人はようけおっちゃったんよ。飯場は2つあった。うちの飯場で10人、隣の飯場も10人ぐらいで、20人ぐらい。多い時は35人ぐらいおったけんね。忙しい時は夜勤もあった。夜勤はお金がいいからね。」（2003年１月24日の聞き取り）

「一番最初に掘ったあっこでは機関銃作りおった。機関銃作ったんはええが、山向いて撃ちよったら30発ぐらい撃ったらもうダメよ。焼けて（玉が）出んかった。機関銃作るのは技術のものだから挺身隊（が作っていた）。朝鮮人は一切入らさんかった。機械は大きな旋盤みたいなものが入っていた。」（2003年２月１日の聞き取り）

賃金を尋ねると「陸軍運輸部の日当が３円50銭～４円ぐらいの時、地下壕掘削は10円～12円ぐらいだった（2003年２月１日の聞き取り）」というからやはり他の現場よりは高かったようだ。が、危険を伴う作業である。しかも日本の企業からの孫請けである。他と比べて若干高額だとしても、その代価が適切かどうかはわからない。その時の苦労を聞こうとすると「当時はああ疲れたとか、えらかった（＝きつい、苦しい）のういうことなんて、のうらんよ（＝ないよ）。兵隊で

たら天皇陛下バンザイ言うて死ぬるぐらいとばっかり思うて、なんの仕事があっても一生懸命しよったけんね。(2003年３月12日の聞き取り)」とあっさり言い返された。

日本が戦争に負けるやいなやａさんの組は自然消滅。一緒に働いていた仲間はみんな、韓国へ帰ったという。同じ組の間ではaさん一家しか日本に残らなかった。残ったのは、故郷へ帰っても土地も仕事もなかったからだ。その後、Ｆさんは結婚し親から独立。Ｆさん自身は平和公園の建設や百メートル道路、紙屋町周辺の道路、広島市民球場の建設など土木工事の現場を中心に働いてきた。今の平和都市・広島の基礎を築いてきたのだ。Ｆさんの娘さんが「親が綺麗な服装をしているのを、ほとんど見たことがない。小さい頃の父親のイメージは夜になると咳をすること」と話してくれたことが印象的だった。

その後、私は何度もＦさんから話しを聞いたが、戦中、戦後の苦労や日本に対する恨み言など、聞くことはほとんどなかった。拍子抜けするほどだった。聞き取りをする私が日本人であることが大きな理由だとは思うが、実はご家族も地下壕を掘っていたことを知らなかった。それは何を意味するのか。日本軍の仕事をしていたという悔恨もあるのではないかと、私は思うことがある。言わないのではなく、言いたくなかったのではないかと。ある在日コリアンの方はこのように話してくれた。「あの年代の在日一世は自分だけは特別に可愛がってもらったと話す傾向がある。辛い経験を自分で慰めたいからである。しかし当時の状況を考えると、軍から可愛がられたということは考えられない。辛いことは話したくないのだ。だから家族も知らないのだ。そこのところは考慮に入れた方がいい。」

３－３　広島駅裏の地下壕を掘ったＧ氏：徴用工として来日

私がＧさんを知ったのは、Ｆさんの一言が発端だった。2005年２月、Ｆさんと話をしている最中に「そういえばこんな手紙をもろうたんじゃが」と言って出してきたのがＧさんの被爆者健康手帳（以下「手帳」）の申請に関する手紙だった。戦後帰国して陜川に住むＧさんは被爆者なのだが、手帳が発行されなかった。申請書の書き方の不備などが主な理由だった(6)。申請書をあらためて書き直し、再度申請し直すことにした。手帳交付申請を手伝うため私は陜川へ向かい、2005年４月Ｇさんと会った。その後、手帳取得のため通訳を通して数度に渡って聞き取りを続けた(7)。

ＧさんはＦさんの遠い親戚にあたり、1945年当時、岡山県内や広島市内で地下壕を掘っていた経験がある。当時、時折Ｆさんを訪ねては一緒に遊んでいたらしい。

1927年生まれのＧさんは陜川で農業をしていたが、1945年４月、同じ村の若者３人と一緒に徴用された。呉で軍隊生活の訓練を受けた後、岡山の海軍部隊に配属され、部隊の裏にあった山の麓の地下壕を掘ったという(8)。１つの穴に８人ほどで作業していたらしい。働いていた人はみな朝鮮人で、徴用で強制的に来た人

たちだったようだ。日本人は監督と監視人だけ。地下壕は他にいくつもあったという。その後、空腹に我慢できず一緒に来た4人で広島に逃亡。その中に広島で生まれ、中学まで出ていた広島出身者がいたためだ。自分は日本語ができなかったので、その人に職場など見つけてもらい4人一緒に地下壕掘りの仕事をして働いた。朝鮮人の飯場にいて、現場はその近くにあった。食べさせてくれたら労賃はいらないという条件で仕事を始めたという。地下壕は広島駅の裏側（駅の北側、現在の新幹線口側）と聞いていたが、逃亡の身であるため、捕まることを恐れてあまり出歩くことはなく、住所をはっきりと覚えていない。そこではたくさん朝鮮人が働いていた。朝鮮人家族がバラックに住み、女性も働いていた。飯場と地下壕を行き来していたが、ある時、遠い親戚にあたるaさんが広島にいることを知り、訪ねていったというのだ。

8月6日の被爆時は防空壕で仕事をしていた。大きな音がして外に出ると薄暗くなっていたという。近くにあった飯場も壊れて無くなっていた。火傷をした人や血だらけの人々が大勢歩いていて、どうしていいのかわからず、aさんの家に避難した。8月15日、日本の敗戦を知ると、aさんから帰国費用を借り、徴用された4人とともに、9月始め頃宇品港から帰国した。当時のことをGさんは以下のように語った。

「陜川で長年、面長をしていたbさんが呉の海軍に務めていて、徴用礼状が出た私たちを連れにきました。礼状をもらって行かないとは言えないでしょう。家族は泣きました。どこに行くかは知りませんでしたが、bさんから海軍に行くとだけ聞きました。釜山から軍用貨物船に閉じこめられて行って、下関かどうかはわからないけれど、どこかに降りて、汽車に乗り、呉までまた船に乗りました。釜山からは大勢の朝鮮人が乗っていました。呉で訓練を受けた時は200人くらいいました。一週間後、岡山にいきました。お腹が空き、仕事はとてもきつかったので、一緒に行った広島出身のcさんが広島に行こうといいました。4人で鉄道に沿って広島まで4日間かけて歩きました。広島では朝鮮人の組に入り、小さい防空壕を掘っていました。」（2005年4月4日の聞き取り）

「防空壕での仕事は上から石が落ちてくるなど常に危険と隣り合わせでした。仕事は8時間で2交代制でした。給料はご飯を食べたら少し残る程度でした。私が日本から帰国した時、村中の人が歌って踊ったりして喜びました。日本に連れて行かれた人はみんな死んだと思っていたからです。」（2005年4月5日の聞き取り）

帰国後、農業をしながら、石工をしていたGさんは1950年に起きた朝鮮戦争で従軍し再び戦争を経験することになった。被爆二世への差別があったため被爆者であることを隠してきたが、病気になったため手帳の申請をし、2006年に取得、日本の援助を受けることができた。

調査する会（1992：106、107）によれば、広島駅の裏側にある二葉山の付近で

第二総軍地下司令部の地下壕が建設されていたことが、文献資料により明らかにされている。しかし調査する会では地下壕の存在を実地調査では確認できていない。敗戦後は開発され住宅地となっていて、舗装された部分が多かったためだ。広島駅の裏側に関しては第二総軍地下司令部のものとは特定できないが、朝鮮人が建設に関わっていたという証言もある（調査する会、1992：107、108、平岡、1972：210-213）。Gさんの証言は、徴用やそれ以外の朝鮮人が多数動員されていた当時の地下壕建設の状況を、より具体的に明らかにすると思われる。

4　結語にかえて：フィールドワークの終わり、新たな始まり

次々に埋められていく地下壕に対して何もできない自分に歯がゆい思いをしながら、なんとかドキュメンタリービデオをまとめ、2005年には広島で、2006年には東京で上映することができた。これまでのべ200人以上の方が見てくださっている(9)。

製作過程で知ったことは数多い。しかし特に強制連行の時期について、一体どれくらいの人々がどういう理由で朝鮮半島から広島に来ていたのか、解明されていることがあまりに少ないことを痛感した。日本に渡ったまま戻っていない人も数多い。現在、韓国政府では日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会をつくり国内外で調査している。日本でも各地域において民間団体やグループが様々な調査を行っているので、今後新たな証言や資料などが出てくるだろう。中でも地下壕など秘密裏に行われた軍関係の作業に従事した人々の証言は貴重である。戦争や強制連行の実相を知るためには、当時のことを知る人々を探し出し、証言を得ることが急務であると思う。今回の私の映像はその一助になったと考えている。

また、地下壕は戦争遺跡として貴重であるが、保存公開されているのはわずかである。韓国では済州島に日本軍が建設した地下壕などが数多く残り、文化財として保存し公開していく方針で進んでいる。すでに一部資料館となっており、大勢の見学者が訪れている。こうした取り組みが日本でも早急に行われるべきではないかと思う。

地下壕の建設現場では、様々な形で朝鮮半島から来た人々が働いていた。そこで今回の論文では強制連行前に渡航してきた在日コリアンの方と、強制連行で来日して地下壕を掘っていた方の証言を取り上げた。またいく度となく伺い、聞き取りする過程で戦時中の出来事が今でも心に陰を落としていることを知った。

戦争を遂行するために動員された人には中国人もいた。海田の地下壕を掘ったFさんは「海田にあった陸軍運輸部には中国人捕虜が大勢いた。飯食わさんでしょ。腹減らしたまま、朝から晩まで100キロ近くある重い生ゴムを下からあげて行って本船に運ぶ。見たらその生ゴムを首に巻いてどぼんと落ちる。自殺よね」と訪問するたびにいたたまれない表情で語った。同じ海外から来た人々のひどい情況を見たFさんの心中は、どのようなものであったろうか。

強制連行で来日し逃亡生活を余儀なくされた陜川在住のGさんは、戦後60年以上経った今でも徴用された際の恐怖を持ち続けていた。初めて私と話をした時、

役所の職員だと思い、徴用から逃げたことを隠していた。途中で証言内容が変わったので、よくよく話しを聞くと、逃亡がばれると罪が問われるのではないかと恐れていたのだった。通訳の方が「今さら罪は問わないし、あなたを助けに来たのだから本当のことを話して大丈夫」と説明し、ようやく体験をぽつぽつと話してくれた。「Fさんと賭け事をして遊んだ」と言った時だけ笑顔になった。

取材中、在日コリアンの方や在韓被爆者の方から「陜川の人は話さないでしょう」と言われた。この言葉が意味することは何なのか。取材を進めるうちに話したくない気持ちと思い出せないことの両面があるのではないかと思うようになった。Gさんは広島での生活や被爆時の様子をあまり覚えていない。来日から帰国まで半年間ほどしかいなかったこともあるとは思うが、被爆はあまりにも衝撃的な出来事である。なぜ思い出せないのか。

出会った在日コリアンや在韓被爆者の方々から、戦前や日本にいた頃のことをかき消されるような帰国後の苦渋に満ちた経験を聞いた。敗戦後、帰国した陜川の人々は故郷に戻っても土地も家もない人がかなりいた。そうした中、韓国の南部で疫病が発生、大勢の死者がでるという情況もあったようだ。そして1950年、朝鮮戦争が勃発。陜川も戦場となり、帰国した人々は再び戦争の犠牲者となったのである。日本で生まれたり幼い頃渡日したため、韓国語がわからず苦労し、また日本にいたことで差別を受けたらしい。原爆の後遺症を抱えながらも、生きるために学校にも行かず働いた人も多くいた。陜川で仕事がないため、釜山や大邱などの都会に出ていった人々も数多い。帰国した人々は次々と身に降りかかってくる出来事に対し、生きることだけで精一杯だった。何十年も前のことを思い出すこともないまま、今日まで生きてきたのではないかと思う。

現在私は在韓被爆者と被爆二世を取材している。日本の植民地支配や戦争が人々に強いた苦難や今も残る苦しみは何なのか、次の映像制作で更に深く探っていきたいと考えている。

【注】

(1) 本文中に出てくる「朝鮮人」は、戦前の朝鮮半島出身者を総称したものである。現在日本に住んでいる人々は、在日コリアンと記述した。

(2) 販売されているものや制作者に依頼すれば視聴できるビデオ映像には、以下のようなものがある。

『ビデオ松代大本営』(監修・松代大本営の保存をすすめる会、制作年不詳)

『戦争の傷跡・高槻地下秘密軍事工場』(監督・辛基秀1983年)

『ビデオ広報たかつきNo46タチソ・戦争の傷跡「高槻地下倉庫」』(企画・高槻市1993年)

(3) 国土交通省HP「平成17年度特殊地下壕実態調査中間取りまとめについて」
http://www.mlit.go.jp/kisha/kisha05/04/041226_2_.html

(4)「特殊地下壕」の対策事業は復興から行われている。1946年度からの内務省・建設省による「特殊地下土木施設整備事業」では一応危険なものに関して埋め戻し工事が行われた。その後も補完的に行われていたようだが、本格的に実施されるようになったのは1974年度からである。

(5) 既存資料に掲載された広島の地下壕に関する証言には以下のようなものがある。

・地下壕の掘削作業をした当事者の証言

「これはトンネル（地下倉庫）掘削のための班別であったようだ。慶尚北道の道庁の土木課に測量技師として勤務していたという金基栢氏は測量班に所属して、いつも中塩隊長の傍らにあって、隊長の指示で計画を立て、測量していた。火薬班はダイナマイトを用いて岩盤を爆破した。木工班は製材された材木を用いて、トンネル内に入れる木枠を作った。」（調査する会編、1992：54）

「朝鮮人だ、みな朝鮮人だった…。手伝いに入った日本人がいて、犠牲者が出たことがあるが、掘った主力は朝鮮人である。ここにはダブルで飯場が並んでいた。そしてあの向こうの方にも飯場があり、少なくとも100人以上いた。しかし、強制連行ではない…。」（前揚書：102、103）

「「あの穴を掘るのに朝鮮人が働いたいうようなことは知っとってないですか」「こちらのことはよう知らん、わしらは秋月の穴を掘らされたんじゃけん」」（前揚書：227）

「あのとき、わしゃあ、牛田（爆心地から二キロ）に陸軍の工事、請けての、人夫三十六人連れて飯場、張っておったんじゃ。兵器廠の、なによ、物資しまう防空壕掘りよ。」（朴、1983：229）

「一年ほどして今度は江田島の秋月に移動。一班五十～六十人で三班に編成された。朝鮮の忠清南道から直接強制連行された青年約三十人がいたが、宿舎も作業場も別だった。しばらくして彼らは作業所から姿を消した。南方に連行されたという話であった。作業は山を掘っての防空壕作り。山は倉庫として使用されており、箱のなかにビール瓶大の爆弾と銃、鉄砲の弾丸が隠されているのを見た。大きくて岩盤の堅い山に、ダイナマイトでハッパをかけたりドリルで穴を開けたりして、くずした岩石を外に運び出した。これら危険できつい作業はすべて朝鮮人がやらされた。」（朝鮮人強制連行真相調査団編、1993a：155、156）

「そして広島へ連行されたのは、原爆投下の二十日くらい前である。広島駅近くの山で、軍需物資を貯蔵するための防空壕を掘らされていた。」（平岡、1972：213）

「原爆の落とされた八月六日は、前から請け負っていた広島駅裏の防空壕掘りの仕事をしていました。原爆が落ちた時は、私は飯場、夫は事務所にいました。他の労務者の方々は防空壕の中で仕事を始めていたと思います。」（鎌田編、1982：134）

・広島の地下壕に関する証言

「彼女が国民学校二年生の時に広島市の向洋に移ってからは、軍需工場や防空壕、水源池の建設など軍の仕事を請け負い、大勢の人を使って、かなり手広く仕事をしていたようである。」（広島・長崎の証言の会、1986：98）

「二葉山の洞窟というのは、第二総軍設置以来「本土決戦」の洞窟司令部として、その山腹に掘ったもので、当時は七分通りできていて、八月六日以後は司令部として利用していたばかりでなく、関係者はその内に居住もしていた。」（小倉、1970：221）

(6) 被爆当時の朝鮮人被害は、広島5万人（うち爆死者3万人）、長崎2万人（うち爆死者1万人）である（市場、2005：27）。現在、在外被爆者は確認されているだけで世界25カ国以上3,000名以上いるが、一番多い国は韓国であり、2,520名（韓国原爆被害者協会会員数、2006年7月31日現在）である。日本国外にいても健康管理手当などが受けられ、手当の申請もできるようにはなったが、在外被爆者は日本政府から日本国内にいる被爆者と同じ援護を受けていない。日本から援護を受けるためには手帳が必要だが手帳取得には難関がいくつもあり、大きな課題は申請の際に必要な保証人探しである。さらに申請から取得まで時間かかり、申請中に死亡するケースもある。手帳取得のためには来日が条

件となっており（2006年10月末現在）、病気などで来日困難な逼迫して援助を必要としている被爆者には支援が行き届いていない。

(7) 2003年から筆者は「韓国の原爆被害者を救援する市民の会」の会員として在韓被爆者の支援活動をしている。在韓被爆者が来日した際の行政の手続きや手当申請のための診断のつきそいなど手伝っている。

(8) 手帳申請の過程で、行政から「海軍の地下壕は岡山にはなかったのではないか」という指摘を受けた。本人の記憶違いもあり得るとは思うが、これまで書いてきたように地下壕は秘密裏に作られていた。確認されていない地下壕の可能性もあり、今後、新たな証言が得られるのを期待したい。

(9)「土の記憶」の上映希望は「Sonomi.Ito@mb2.seikyou.ne.jp」まで

【参考文献】

米国戦略爆撃調査団、1946～以降順次刊行、『米国戦略爆撃調査団報告書（太平洋戦争）』全108巻

朝鮮人強制連行真相調査団編、1992～2002、『朝鮮人強制連行調査の記録』全6集（四国編：1992、兵庫編：1993a、大阪編：1993b、中部・東海編：1997、中国編：2001、関東編1：2002）、柏書房

兵庫朝鮮関係研究会編、1990、『地下工場と朝鮮人強制連行』明石書店

広島の強制連行を調査する会編、1992、『地下壕に埋もれた朝鮮人強制労働』明石書店

平岡敬、1972、『偏見と差別 ヒロシマそして被爆朝鮮人』未来社

広島・長崎の証言の会、1986、『イルボンサラムへ 40年目の韓国被爆者』汐文社

市場淳子、2005、『ヒロシマを持ちかえった人々「韓国の広島」はなぜ生まれたのか』凱風社

浄法寺朝美、1981、『日本防空史』原書房

十菱駿武・菊池実編、2002、『しらべる戦争遺跡の事典』、柏書房

十菱駿武・菊池実編、2003、『続しらべる戦争遺跡の事典』柏書房

久保井規夫、1995、『地下軍需工場と朝鮮人強制連行　隠された戦跡１』明石書店

鎌田定夫編、1982、『被爆朝鮮・韓国人の証言』朝日新聞社

小倉豊文、1970、『広島原爆の手記-亡き妻への手紙-』八雲井書院

朴慶植、1965、『朝鮮人強制連行の記録』未来社

朴壽南、1983、『もうひとつのヒロシマ朝鮮人韓国人被爆者の証言』舎廊房出版部

戦争遺跡保存全国ネットワーク編、1999、『戦争遺跡は語る』かもがわブックレット

戦争遺跡保存全国ネットワーク編、2003、『戦争遺跡から学ぶ』岩波ジュニア新書

戦争遺跡保存全国ネットワーク編、2004、『日本の戦争遺跡』平凡社新書

（いとう　そのみ）